

I 2024 年度事業及び決算概要

世界情勢

2024 年は世界的な選挙イヤーとなり、先進国から新興国まで選挙が広範囲で実施され、世界 GDP の 8 割以上を占める G20 のうち 11 の国・地域に及ぼしました。インフレや景気後退が市民生活を悪化させたことを受け、世界中で既存与党が大きく敗北し、右傾化が進行しました。2024 年最大の政治イベントであった米国の大統領選挙もその例に漏れず、現職・与党の民主党に厳しい結果となり共和党候補であるドナルド・特朗普前大統領が民主党のカマラ・ハリス副大統領を破り、第 47 代大統領に返り咲きました。これにより、米国の政策が大きく変わり、政治・経済のみならず、科学技術分野にも影響が出てきます。HHS（米国保健福祉省）の予算削減、WHO（世界保健機構）からの脱退や ED(米国教育省)の廃止は、科学技術の進展を阻害するものです。自由な研究環境、世界からの研究者の受け入れ、潤沢な研究費などで世界をリードしてきた米国の科学技術ですが、政策次第では大きく後退し、世界の構図が大きく変わる可能性があります。Nature が米国の研究者 1,608 名を対象にした調査が 2025 年 3 月に公表されました。トランプ大統領の政策が実行されるのであれば、米国を離れ、別の国で研究を続けたいと考えている研究者が 75% を超えており、若い研究者ほど米国を離れる考え方の人が多いという結果でした。世界各国によるこれら研究者の獲得合戦になる可能性もあります。

ノーベル賞

2024 年のノーベル賞は AI (人工知能) が席巻しました。ノーベル物理学賞と化学賞の AI 関連分野の研究者に贈られました。今回の物理学賞は「機械学習においてニューラルネットワークを利用可能にする基礎的な発見と発明」を理由に、ジョン・ホップフィールド（プリンストン大学名誉教授）とジュフリー・ヒントン（トロント大学名誉教授）が受賞しました。そもそも受賞対象分野にすらなっていないコンピューター科学の手法にノーベル賞が与えられることは、かなり稀なケースといえます。化学賞は「コンピューターによるタンパク質のデザイン」を理由にデビッド・ベイカー（ワシントン大学教授）が、「タンパク質の構造予測 (AlphaFold の開発)」を理由にデミス・ハサビス (Google DeepMind CEO) とジョン・ジャンパー (Google DeepMind) が受賞しました。彼らの研究とはいわば「化学の問題を解くために作られた、コンピューターアルゴリズムの研究」であり、「AI for 化学」と形容できます。化学賞を受賞したハサビスは会見で、「AI は科学的発見を加速させる究極のツールになるかもしれない」と語っています。

医療領域での AI の活用

現在、医療領域において、AI は診断、治療法の選択や創薬の分野で使用され、多くの成果が報告されています。歯科医療においても、様々な可能性が期待されており、それぞれの分野において研究が進められています。画像診断や治療法の選定のみならず、生活習慣から将来のリスクを推測し、予防方法を提案するなど、予防歯科の領域での活用も期待されます。日本歯科医学会のイノベーションロードマップにおいても、その第Ⅲ期に「AI 診断により最適治療法が確立する」「AI ロボットによる遠隔歯科支援システムが実用化される」などがあげられています。近い将来、「AI for 歯科医療」が実現することでしょう。そのためには、今、AI 研究と併せて、AI に学習させるための信頼性の高いビッグデータの収集に向けて、多施設連携による地道な研究が必要です。

日本の研究環境

世界的な物価高騰と円安は日本の科学研究に大きな影響を及ぼしています。日本の研究開発費はアメリカ、中国に続く世界第3位の水準にあります。ここで問題と考えられるのは、10年前、5年前と比較してほとんどの国において投資が大きく拡大しているにもかかわらず、日本の研究開発費の伸びがかなり小さいことです。特に最近の5年間においては、投資上位の主要国の中で唯一マイナスになってしまっています。研究に必要な資材は高騰し、論文掲載のための投稿費用、学術雑誌の購読費用も高騰、さらには海外渡航滞在費用も高騰するなど、日本の研究者は今まで経験の無い節約研究を進めなければならないような状況におかれています。

人生100年と言われる中で、歯科医療は今までにも増して大きな役割を担っています。にもかかわらず、歯学研究においては、研究助成などの資金面での支援が乏しく、歯学研究者はより厳しい環境に置かれています。これから歯科医療を担う若手研究者に対して海外の研究者や他分野の人との交流を含めた様々な支援が求められています。

このような状況のもとで、当財団は研究助成の充実が必要と考え、従来の研究助成を受けた若手研究者を対象とした継続助成を実施すべく、検討を重ね、2024年度から3年毎に「フォローアップ助成」を開始しました。フォローアップ助成においては、贈呈式と交流会を開催し、歯学研究者同士、歯学研究者と他分野の研究者のネットワーク構築の支援を目指しています。

また、財政面においては、所有の一部の債権で償還がありましたが、保有株式増と株券の貸借取引の継続により主要な収益源を確保しました。収入全体としては、保有株式の配当金の増額等によって、予算に対して1,478千円の增收があり、財政的には余裕をもって運営できました。本年度は第1回フォローアップ助成を実施し、新助成第1期分積立金から4,000千円を取り崩して対応しましたが、研究助成者報告書作成費、助成事業認知拡大のための経費などが増加したことにより、事業費は計画に対し、844千円の超過、管理費はほぼ計画通りとなりました。その結果、一般正味財産期末残高は前年より1,185千円減少し、382,350千円となりました。

事業の概要：

今年度も例年通り3月に募集案内の送付、4月1日から募集を開始しました。5月の春季学会にて応募喚起を行い、6月7日に応募を締め切りましたが、74件のご応募をいただきました。

助成者の選考におきましては、ご提出いただいた申請書を基に事前に①申請者の資格などの適切性、②研究内容の適切性、③助成金の用途の適切性、④推薦書の内容などを考慮しての総合評価、の4項目について採点する書面による第一次審査を実施しました。その後、対面による選考委員会を開催、第一次審査の結果を基に部門ごとの第二次審査を行ったうえで、選考委員による総合討論で助成者を選考しました。書面による第一次審査が定着したことで、客観的かつ効率的な選考が可能となり、応募総数74件に対して所定の28件の選考が円滑に行われました。今年度もまた、各研究助成金受給者により報告書を提出していただき、「2024年度研究助成者報告書」に纏め関係者及び関係機関に配布致します。

また、今年度は若手研究者を支援するために、将来有望な歯学研究者を育成する施策として、過去に当財団の助成を受けた研究者を継続的に支援する「第1回フォローアップ助成」を実施しました。従来の研究助成と同様に、3月から案内を開始し、6月1日応募を受け付け、8月2日に応募を

締め切りましたが、59件のご応募をいただきました。研究への取り組み姿勢、研究業績、応募研究の内容など、全8項目について、選考委員による一次評価を行い、一次評価の結果を基に選考委員それぞれが助成候補者を推薦する審査方式としました。10月3日開催の選考委員会では、夫々の選考委員の推薦結果に基づき、選考委員全員で慎重かつ厳正に審査し、応募総数59件に対して所定の5件選考が公正に行われました。この5件につきましては、3年間継続で合計100万円の助成が行われます。第2回フォローアップ助成は2027年を予定しています。

決算の概要

正味財産増減計算書において、経常収益では保有株式の配当金の増加、株券貸借契約の継続、一部の債券の償還などがありました。配当金が増加したため、昨年度より660千円増の19,822千円の収益となりました。この収益のうち、公益目的事業は11,302千円、約57%、法人会計は8,520千円、約43%です。また、評価損益等調整前の当期経常増減額は1,814千円のプラスで、公益目的事業関係では1,877千円のマイナスとなりました。

法人会計関係では、株式配当金の増加と株券貸借契約の継続が収入増に寄与し、3,692千円のプラスとなりました。因みに経常費用における公益比率は73.2%です。

なお、第1回フォローアップ助成実施に際して、新助成第1期積立金8,000千円から4,000千円を取り崩しました。

また、第2回フォローアップ助成を2027年度に実施するため、経常外費用として新助成事業積立金第2期分(3,000千円)の繰り入れを行いました。

以上の結果、一般正味財産期末残高は382,350千円となりました。